

ピンクパンサー

2006(平成18)年5月9日鑑賞(試写会・御堂会館)

★★★★



監督=ショーン・レヴィ/出演=スティーブ・マーティン/ケヴィン・クライン/ジャン・レノ/ビヨンセ・ノウルズ/エミリー・モーティマー/ヘンリー・ツェーニー (メトロ・ゴールドウィン・メイヤー・ピクチャーズ配給/2006年アメリカ映画/93分)

……ご存知『ピンクパンサー』のスタートは、1963年の『ピンクの豹』から。それから約40年。新たな装いで再スタートした『ピンクパンサー』は、クルーゾー警部の真面目な(?) 間抜けぶりにズッコケの連続で、観客は爆笑の渦に……。もっとも最後には、意外とカッコいいクルーゾー警部の真骨頂が……? やっぱ映画はオモロイのが1番。こんな映画サイコー!

『ピンクパンサー』総まとめ……

年配の映画ファンなら、『ピンクパンサー』という映画のイメージを誰でも持っていると思うが、若い人たちは意外と知らないのでは……? なぜなら、『キネマ旬報』5月下旬号には「作品特集」としてこの『ピンクパンサー』が組まれているが、それを勉強すると、第1作たるアニメキャラの「ピンクパンサー」の誕生は1963年、そしてラストの『ピンク・パンサーの息子』の公開は1993年だから、もう10年以上も途切れていたことになるのだから……。

「ピンクパンサー」では、クルーゾー警部を演じたピーター・セラーズとヘンリー・マンシーニによるあの軽妙なテーマ曲が有名。しかし、全20作となった『007』シリーズだって、ジェームズ・ボンド役には2代目、3代目が登場しているのと同じように、ピーター・セラーズ亡き後のクルーゾー警部を演ずるのはスティーブ・マーティン。その他、今回の『ピンクパンサー』は、俳優陣の刷新を含めてまさに新装開店(?)のピンクパンサー……?

「ピンクの豹」はちょっとしたお飾りに……

「ピンクパンサー」という言葉が一人歩きしているため、その正確な意味は私も知らなかったが、今回勉強してわかったのは、豹型の傷を持つ巨大なピンクダイヤモンド＝ピンクパンサーだということ……。第1作の『ピンクの豹』（63年）は、怪盗ファントムがこのダイヤモンドを狙う犯罪映画で、クルーゾー警部はこのファントムに振り回される間抜けな脇役だったらしい。ところが、このクルーゾー警部のキャラが意外に好評だったため、その後「ピンクパンサー」という名前をうまく活用しながら、人気映画として定着してきたというわけだ。そこで、さて今回の「ピンクの豹」の位置づけは……？

今回のテーマは？

今回の主たるテーマは殺人事件。しかもその舞台は「21世紀版」のピンクパンサーらしく（？）サッカー場で、フランス代表チームが中国代表チームを破り、その監督のイヴ・グルアンが熱狂的なファンに囲まれる中、毒を塗られたダートを刺されて殺されるというもの。したがって、「ピンクの豹」のダイヤモンドは「お飾り」（？）となり、このグルアン監督が指にしていた「ピンクパンサー」の指輪もこの時同時に盗まれていたという位置づけ。さあ、ここでクルーゾー警部の登場だが……？

俳優ピーター・セラーズとは？

『ピンクパンサー』第1作『ピンクの豹』とその次の『暗闇でドッキリ』（64年）でのクルーゾー警部はピーター・セラーズが演じていたが、第3作『クルーゾー警部』（68年）では、イメージの固定化を嫌った彼はクルーゾー役を降りることに。しかし、その後シリーズ化を意識して製作した『ピンク・パンサー2』（75年）、『ピンク・パンサー3』（76年）、『ピンク・パンサー4』（78年）では、ピーター・セラーズがすべてクルーゾー警部を演じ、大人気となった。ところが、こんなピーター・セラーズが突如1980年に54歳で死亡したため、またまた『ピンクパンサー』シリーズは変貌を遂げていくことに……。ところで、映画というの

は面白いネタになりそうなものには何でも突っ込んでいくもの……？ この「ピンクパンサー」を中心とした喜劇俳優としてのピーター・セラーズの生きざまを描いた映画が『ライフ・イズ・コメディ！～ピーター・セラーズの愛し方～』（04年）。これはいわば彼の伝記映画だが、その自由奔放で、破天荒な生きざまには本当にビックリ……（『シネマルーム7』168頁参照）。

ドレイフュス警視とは？

『ピンクパンサー』シリーズでは、主人公クルーザー警部の側には必ず彼を引き立てる役柄が必要で、これが今回はドレイフュス警視（ケヴィン・クライン）。ドレイフュスは、『ピンク・パンサー2』では精神病院に送られ、『ピンク・パンサー3』では、クルーザー警部と全面対決したりと、その役割はさまざまだが、今回登場するドレイフュスは警視という重要な役職についているうえ、メダル・オブ・オナーに7回もノミネートされているという警察畑のエリート官僚。そんなドレイフュス警視に任されたグルアン監督殺害事件の解決のために彼が考えたのが、「フランス1アホな警官」であるクルーザー警部の活用。すなわち、しがたない警官クルーザーを警部に昇進させて、この事件を担当させ、彼がトンチンカンな捜査を進めている間に、自分が真犯人を逮捕し、その手柄によって今度こそメダル・オブ・オナーの受賞を確実に……、という魂胆だが……？

今回は第3の人物も……

あまり突出するキャラが多く登場するとうとうしいが、今回は第3の男として、ジャン・レノ演ずる寡黙で誠実なクルーザー警部のアシスタント役として、ジルベール・ポントン刑事が登場する。彼は、実はドレイフュス警視が送り込んだ「スパイ」で、クルーザー警部の捜査状況を逐一、ドレイフュス警視に報告すべき任務を負っているもの。しかし、「フランス1アホな警官」クルーザー警部の捜査に「2人ペア」で取り組んでいくうち、ポントン刑事は少しずつクルーザー警部に「同化」……？

『『ピンクパンサー』はフランス映画』というイメージが強いだけに、フランス人俳優ジャン・レノの起用は大成功。あくまで、主役のクルーザー警部を盛り立

てる控えめな役柄をジャン・レノがきっちりと演じて、映画の締まりをよくしている。もっとも、いつも主演を張っている彼が、ナンバー2、ナンバー3の役柄での出演をよく承諾したものと感心……。

真面目だから、面白い……？

最近のテレビの「アホバカバラエティー番組」に毎度のように登場するお笑いタレントやアホバカキャラのタレントたちが全然面白くないのは、こんな面白いギャグを言って、あるいはこんな客受けするアクションによって、視聴者を笑わせようという姿勢がミエミエなため……？ 最悪のケースは、自分自身と周りの出演者たちだけがゲラゲラと笑いあっていること。そんなシーンを視聴者が画面で観ても、面白くも何ともなく、逆に白けるだけ……。

ところが、よくできた「お笑い映画」では、その役を演じている俳優は真剣。チャップリンにしても、フーテンの寅さんにしてもそう。本人は決して周りを笑わせようと思って行動しているわけではない。それは、新装『ピンクパンサー』のクルーズー警部も同じ。彼が自己の任務を忠実に遂行しようと努力していることは明らかだ。部屋に入った時、怪しい奴がいないかどうかを確認することは捜査の「いろは」だから、その基本に忠実に行動していることもよくわかるだけに、あの毎度のギャグ(?)には爆笑……。その他、クルーズー警部は決して「フランス1アホな警官」ではなく、「フランス1基本に忠実な警官」。だからこそ、その本人の思いと現実に現れる結果との乖離の大きさに観客は爆笑せざるをえないわけだ。

さらにこの映画のいいところは、周りから笑われバカにされるような行動であっても、地道な努力を続けていけば結果が伴うということを教えてくれること。映画のラストに登場するクライマックスシーンでのクルーズー警部のカッコいいこと……。こりゃまるで、名探偵シャーロック・ホームズか、金田一耕助か、と見まちがうばかり……？

お色気もちょうどいい加減……

グルアン監督殺害の際、ピンクダイヤモンドの「ピンクパンサー」が誰に盗ま

れたのか、というテーマについてポイントとなるのが、グルアン監督の恋人であり、世界的に有名なポップ・スターの美女ザニア（ビヨンセ・ノウルズ）。サッカーのスター選手ではなく、監督との恋愛というのは、ちょっと年が離れているだけに、何となく怪しげなものがあるが、その悩殺衣装はこの映画にちょうどいい加減のお色気を提供……？ そんな彼女とピンクダイヤモンドがどんな関連を持つのか……？

あなたにクルーザー警部並みの注意力があれば、ひょっとするとそれを見破ることができるかも……？

クルーザー警部の愛車は……？

警察官が乗る車はパトカーか、そうでなくても実用的な車一辺倒だと思っていたら、それは大まちがい。

この映画に登場するクルーザー警部の愛車は、何と日本ではダイムラー・クライスラー日本株式会社がベンツなどと一緒に販売している「スマート」という超小型車。小回りがきくから縦列駐車にも便利というのがこの車の1つの売りだが、何とクルーザー警部はそれもヘタクソ……。ちなみに大きなお世話ながら、この小さい車にクルーザー警部とポントン刑事という2人の大男が乗れば、走行性能はかなり落ちるのでは……？

真犯人はダレ……？

この映画におけるクルーザー警部の基本任務は、グルアン監督殺害事件の犯人捜し。警部に昇進し、その任務遂行の意欲に燃えるクルーザー警部は、捜査マニュアルどおり（？）、基本に忠実な捜査を進めていき、犯人像を次第に狭めていった……？ ホンマかいな……？ その捜査線上に浮上するのが、態度の大きなサッカーのスター選手（ウィリアム・アバディー）、億万長者のカジノ・オーナー（ロジャー・リーズ）、なれなれしいP.R.パブリシスト（クリスティン・チェノウェス）、そして「かつての恋人を横取りされた」とグルアン監督を恨んでいるユーリ（ヘンリー・ツェーニー）など。彼らはそれぞれグルアン監督との関係において、何らかの曰く因縁があるから、それぞれが殺人の動機を持っているこ

とはたしか……。

犯人をとっつかまえないことには、クルーザー警部の面子は丸潰れ。そして、クルーザー警部失職後、ドレイフス警視が犯人を逮捕でもすれば、まさにドレイフス警視の思うつぼ。さて、真犯人はダレ……？ そして、それを逮捕することができるのはクルーザー警部それともドレイフス警視……？

ストレス解消にはもってこい！

今日は試写室ではなく、大きな試写会場でこの映画を観たが、案内してくれた宣伝部の人による事前情報は、「とにかく面白いですよ。何も考えないで笑って下さいね」というもの……。映画が始まり、ドレイフス警視に呼び出されたクルーザー警部が登場すると、その軽妙な演技にたちまち会場のあちこちからクスクス笑いが……。そのうち、私も遠慮がちに(?) 笑う場面が増えてきた。映画は、クルーザー警部の「ある大失敗」によって、ドレイフス警視の目論見どおり、クルーザー警部の任務が解かれ、クルーザー警部は失意のどん底に……。しかし、あくまで地道に犯人追及の努力を続けたクルーザー警部は、遂にパソコンの画面からある大発見を……。

ハイライトとなるのは、ドレイフス警視が目論む、犯人逮捕を大々的に発表しようとするパーティー会場。ドレイフス警視は手柄を独り占めにし、メダル・オブ・オナー受賞を確実にしようとする魂胆だ。そこに、再びタッグを組んだクルーザー警部とポントン刑事が珍妙な姿で乗り込んでいくサマは、爆笑の渦……。さらに美人秘書のニコール（エミリー・モーティマー）も、ここでは軽妙な喜劇役者としての演技を披露……。こんな映画は、まさにストレス解消にもってこい！ そして、こんな映画サイコー！

2006(平成18)年5月10日記